

幼き日のこと 井上靖



幼き日のこと

井上 靖

毎日新聞社

幼き日のこと

九五〇円

昭和四十八年六月五日 第一刷
昭和四十八年七月十日 第二刷

著者 井上靖

編集人 浜田 琉司

発行人 朝居 正彦

発行所 毎日新聞社

〒一〇〇 東京都千代田区一ツ橋
〒五三〇 大阪市北区堂島上
〒四五〇 名古屋市中村区堀内町
〒八〇二 北九州市小倉区紺屋町

印刷 図書印刷 製本 大口製本

©一九七三 井上靖

幼き日のこと

目次

旭 あ ふ 患 曾 旅 季 食

べ
も 祖 ら

川 し ろ い 母 情 節 の

7 37 57 69 83 101 111 131

ち ち は は	へ ち ま 水 そ の 他	正 月	歳 暮	山 火 事	祭	若 い 叔 母
251	239	219	205	187	167	143

本文挿画

平山郁夫

上村松篁

加山又造

装幀

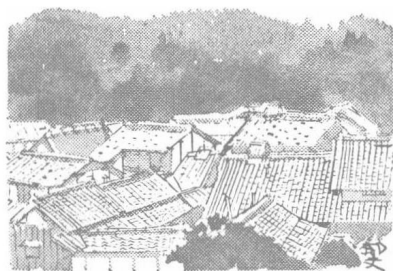
安東 澄

幼
き
日
の
こ
と

旭 川

私は明治四十年（一九〇七年）に北海道の旭川で生れた。父は当時第七師団軍医部勤務の二等軍医であった。父は二十七歳で、母は二十二歳であった。

父は金沢医専を出ると、軍医を志願し、最初の任地として旭川の師団に配された。まだ軍医学校にもはいっていなかったもので、一人前の軍医とは言えず、軍医の卵みたいなものであったのだろうと思う。旭川への赴任を機に、父と母は長い婚約時代にピリオドを打って、最初の任地に於て新婚時代を過したのである。



私が生れた翌年、朝鮮の動乱によって、第七師団に出動命令が降り、父も従軍することになった。そのために年が明けると早々、母親と私は郷里である静岡県伊豆の山村に帰った。従って、私が旭川に居た期間は一年足らずである。満一歳になっていないので、旭川については何の記憶も持っていないし、思い出も持っていない。道産子には違いないのであるが、旭川で生れたというだけのことである。

旭川では官舎に住んでいた。当時の郵便物の宛名は、「北海道上川郡旭川町第二区三条通十六ノ二」となっている。聯隊れんたいの近くの陸軍官舎地区の一隅に小さい家を貰っていたのであろう。それはともかく、私は旭川のその官舎で母のお腹なかにはいり、そのお腹から出、そして一年足らずの短い期間、旭川という土地の空気を吸い、そして慌しくそこを引揚げたのである。

幼時、多少の物心がついて、自分が母親の腹部に仕舞われていたことを知るようになって、私は自分が母親の腹部の中にはいっていた状態を、何となく蛹さなぎが繭さなぎの中にはいっているような、そのような状態として受け取っていた。郷里の山村では、どこの家に行っても蠶棚かいこがあり、私たちは幼い頃から繭や蛹には馴れっこであった。自分は繭の中で身を縮

め、息をこらして、外へ出して貰う時の来るのを、おとなしく待っていたのだ、そんな風に解釈していたのである。

閉じ籠められている世界はほの明るい平安なものであった。繭の白い表面のほんのりとした光沢、それを手にした時のやわらかい手触り、そうしたことから、そこがほの明るい微光が一面に立ち込めている、少しぐらいどこかにぶつかろうと痛くはない世界に思われたのである。とにかく私は母親の腹部をそのようなものとして理解していた。今思っても、そういう受取り方は間違っていない。確かにお蠶さんが繭から出るように、私は母親の腹部から出たのであり、それまでそこに暖く、大切に仕舞われていたのである。

いつのことか、母は旭川時代に、大きいお腹をして、雪の落ちている中を、近くの市場まで買いものに行つたというようなことを語ったことがある。私の五、六歳の時のことはなかったかと思う。その時の私がこの母の語つた旭川の生活の一断片に、いかなる反応をしたか覚えていない。しかし、このことをついにこの年齢まで忘れないで憶えているのであるから、それが幼い心に強く刻み込まれたことだけは確かである。

それなら、どうしてそのように強く心に刻みつけられたのであろうか。今に思ふ

と、私は母の腹部に仕舞われたまま、母といっしょに雪が舞っている中を、市場まで買いものに行ったという一種の感動ではなかったかと思う。自分は決して旭川という町に無縁ではない。母の腹部の繭のようなものの中に仕舞い込まれてはあったが、とにかく旭川という町で、雪の降る日、その市場まで買いものに出掛けたのである。自分はたくさんもののに包み込まれている。繭に包まれ、その上を母のお腹で包まれ、更にその上を母親の着物で、マントで包まれている。そして雪の舞っている中を、母親といっしょに市場に向って移動して行ったのである。乾物屋の前に立ったり、八百屋の前に立ったりする。そしてまた母といっしょに雪の舞う中を三条通りの小さい官舎に戻って来たのである。

もちろん、これは今の私が、何も喋れなかった五、六歳の自分に替って代弁してやっているのであるが、大体このようなことになるのではないかと思う。でなくて、ただこれだけのことを、終生忘れないでいる筈はない。今の私には、大きなお腹を抱えて、雪の日に市場まで出掛けて行ったという話の中には、母の悲しみが籠められているように思われる。或いは母は旭川で過した新婚時代の辛かった思い出の一つとして、——辛くはなかったとしても、多少どこかに悲しさの感じられる思い出の一つとして、それを語ったのであったか

も知れない。そして幼児の私にも、何となくそれが感じられたかも知れない。母は辛かったであろう。辛かったかも知れないが、それはそれとして、自分は幾重にも、繭や、母のお腹や、着物や、マントに大切に包み込まれて、母といっしょに旭川の一面を歩いたのである。私は母に関する思い出の中で、この話が好きである。嬰兒の私もその話の中に一つの役割を持ってゐるからである。

旭川について、私はもう一つ思い出を持っている。正確には思い出と言えるかどうか判らないが、それがかなり鮮明な視覚的イメージを伴って思い出されて来るので、やはり私にとっては、思い出と呼ぶ以外仕方ないようなものである。

広い練兵場の端しのようなところに市が立っている。地面は一面にぬかるんでいる。もうどこにも雪はないが、雪解けのためのぬかるみが、まだ乾くところにはいつていないのである。そこにいろいろな物を売る小屋掛けの店が立ち並び、その辺りに人が群がっている。店も、人も、半ば泥にまみれている。そうした一画に明るい五月の陽光が降り注いでいるが、陽の光も、空気も、まだ冷たい。

そこを母は歩いている。母は私を産んで身軽になっている。産後の最初の外出である。

私が生れたのは五月六日であるから、母のこの外出は五月の終り頃ではないかと思われる。

母は同じ官舎地区に住んでいる上司の細君といっしょである。母はその年長の女性に見立てて貰っては、こまごましたものを買っている。初めて子供を産んだので、子供を育ててゆく上に必要なものを、年長の経験者の意見を入れては買い調べているのである。湯婆かたんぼを買ったり、おしめカバーの便利なものを買ったり、毛糸の帽子を買ったりする。湯上りの嬰兒の体に振りかけるパウダーを買ったり、哺乳壺を買ったりする。

——それはやめて、これになさい。
とか、

——これも一つ買ってとおきなさい、便利だから。

とか、そんな言葉が年長の女性の口から出ている。二十二歳の若い母親は素直にその言葉に従っている。

この一枚の絵には私は登場していないが、全く無関係とは言えない。母と年長の女性の二人を動かしているのは、私自身にほかならないからである。私はその時官舎の一室で蒲

団の中に仰向けに寝させられていたか、手伝いの老婆の腕の中にでも居たのであろう。

この産後最初の外出のことも、母からいついかなる言葉で語られたか知らないが、私の心の中には、いつか、このような絵として仕舞われているのである。私はこの絵の中の若い母も好きだが、母に親切であった年長の女性も好きである。私はこの一枚の絵を、その女性への感謝の気持なしには思い出せない。感謝と言うと強くなり過ぎるが、幼い時から今日まで、いつも一種独特の好感で、その女性に対してしているのである。六十何年か前の五月のある日、嬰兒の私のために、一人の女性は母といっしょに旭川の市のぬかるみの中を歩いてくれたのである。

明治四十一年の初めに、母は私を連れて、旭川から郷里伊豆に移ることになった。第七師団に朝鮮出勤の命が降り、父も従軍することになったからである。

その時、母の父親、つまり私にとっては祖父に当る人物が、郷里から旭川まで迎えに向いて来てくれた。若い母親が嬰兒を連れて、長途の旅行をするのを、祖父として見ていられなかったのであろう。

その後、私は少年時代をずっと郷里で過したが、この母方の祖父とはいっしょには暮さ

なかった。その上祖父は子供嫌いだったので、私も祖父には懐かなかつた。私は祖父にはついに縁の薄い孫でしかなかったが、しかし、この旭川から郷里伊豆までの旅に於て、私は祖父の世話になった。旭川から函館までの汽車の中でも、函館・青森間の連絡船の中でも、そしてまた青森から郷里までの乗物の中でも、私は母に抱かれていますより、祖父の腕の中に居る時の方が多かったようである。祖父はよくこの時のことを話した。いかにその旅が難渋を極めたものであったかということを、繰返し繰返し話した。

海が荒れたため、函館・青森間の連絡船の中で、母は半病人のようになってしまい、祖父は私の世話や母の世話でたいへんだったらしい。

——海を見るのが初めてだったので、海を見ると泣き、北海道には青いものがなかったので、青森に着いて樹木の葉の青いのを見ては泣いた。よく泣いた。泣きずめに泣いた。旭川から郷里まで泣きっぱなしだった。

祖父は私について、このような言い方をした。私に言ったのではなくて、ほかの人に語るのを傍で聞いていたのである。

私はそんな時いつも祖父に抗議したいものがあるのを感じたが、それが何であるか判ら